

# テキストとしての判決

## ——「近代」と「憲法」を読み解く

駒村圭吾 編著

2016年12月発売 / 338頁 / 本体5500円+税  
A5判 / 上製



編集  
担当者  
から

テキストって何、とお思いでしょう。本書は、最高裁の判決を素材として、一人一人の執筆者が、そこに隠されている「近代」と「憲法」の思想を探り出してみせるという試みに挑戦した、新しい判例研究の手法への取組みの成果です。憲法研究者を中心として、民法・法哲学分野からもご執筆をいただきました。

「判決を読む」ということ、それ自体は、本誌の読者が日頃向き合っているような、学習方法や実務の道具立てとしての「判決の読み方」よりも、もっと知的で深みのある作業となりうることを示したい。そう考えた執筆者たちは「近代」の手がかりとなる、思想・宗教・文学・歴史といった光を判決文に当てて、反射光に目を凝らしました。果たして判決文という一見硬直的なテキストの中に「近代」と「憲法」は見つかるのか。

学習や実務に少しお疲れのあなたと、もう一度、知的探求心に溢れる冒険に出たい。そんな思いの詰まった、珠玉の論文集です。(清田)

Index

I

充実の執筆陣と重要判例！

小粥太郎「田中耕太郎からみる近代——謝罪広告請求事件」

駒村圭吾「文学裁判とふたつの近代批判——『チャタレイ夫人の恋人』事件判決」

渡辺康行「憲法判例のなかの家族

——尊属殺重罰規定違憲判決と婚外子法定相続分規定違憲決定」

林 知更「論拠としての『近代』——三菱樹脂事件」

蟻川恒正「裁判官と行政官——猿払事件最高裁判決」

石川健治「精神的観念的基礎のない国家・公共は可能か？——津地鎮祭事件判決」

山本龍彦「憲法上の財産権保障とデモクラシー——森林法判決」

大屋雄裕「宗教の近代性とその責任——空知太神社事件」

宍戸常寿「司法制度改革の中の裁判官——裁判員制度合憲判決」